

# 琉球大学学術リポジトリ

## 島地大等が宮沢賢治に与えた影響

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 琉球大学留学生センター</p> <p>公開日: 2008-07-03</p> <p>キーワード (Ja): 大乘起信論, 法華経, 諸法実相(十如是), 一念三千, 十界互具</p> <p>キーワード (En): The Awakening of Faith, The Lotus Sutra (Myohorengekyo), The ten essential qualities, or characteristics, of thing, The 3,000 worlds in one thought, The ten realms of existence, each containing the other nine realms</p> <p>作成者: 田村, 公子, Tamura, Kimiko</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6575">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6575</a>

## 島地大等が宮沢賢治に与えた影響

田村 公子

## 要 旨

本稿では、宮沢賢治が「法華経」に帰依するきっかけとなったものは、島地大等著『漢和対照妙法蓮華経』であることを主張する。

具体的には、以下のことを指摘する。

- (1) 大等の「大乘起信論」講義と『漢和対照妙法蓮華経』の解説が、賢治を「法華経」に開眼させた。(2～6節)
- (2) 『漢和対照妙法蓮華経』の解説中の日蓮への言及が、賢治に日蓮への関心を抱かしめた。(8節)
- (3) その結果、「浄土門」への懐疑が生じ、日蓮の「唱題」を選ぶようになった。(7節)
- (4) 大等と賢治の「大乘起信論」の理解の仕方に相違がある。(9節)

キーワード：大乘起信論，法華経，諸法実相（十如是），一念三千，十界互具

## 1. はじめに

宮沢賢治（1896-1933）が島地大等（1875-1927）の『漢和対照妙法蓮華経』（以下「赤本法華経」と称す）を読み感動したことは、広く知られている。大等は浄土真宗願教寺の住職でありながら、阿弥陀一仏に偏しない天台の碩学であり、「赤本法華経」の解説も天台に則って書かれている。精神も物質も混沌として、どこに価値を置いてよいか分からない時代にあって、古典の正しい伝承を使命としてきた大等の、弘伝を願う篤い思いから「赤本法華経」は生まれた。

しかし、「赤本法華経」が賢治に与えた影響を具体的に研究したものは少ない。「赤本法華経」の構成に触れたものに、宮沢敦郎『伯父は賢治』（1989）八重岳書房、森荘巳池「宮沢賢治と法華経の関係」（大島宏之編『宮沢賢治の宗教世界』1992溪水社）、大橋富士子『宮沢賢治 まことの愛』（1996）真世界社、梅原猛「賢治と日蓮」（『文学界』1996年9月号所収）などがある。梅原と大橋は、同書の「解説」の中で大等が

日蓮を称讃していることに着目し、そこに賢治の日蓮への帰依の一因を想定している。

筆者は梅原・大橋と立場を同じくするが、本稿では、大等が賢治に与えた影響を、より詳細に、両者の言及していない「大乘起信論」(以下「起信論」と、「赤本法華経」,「書簡」を手がかりに考察する。

「法華大意」「法華総観」「寿量品意」などは、「赤本法華経」中の大等による解説である。これらの懇切丁寧な解説がなかったならば、賢治の「法華経」理解は浅いものにとどまったであろう。

## 2. 「法華経」理解の善知識としての「起信論」講義

明治44(1911)年8月、賢治(15歳)は大沢温泉の夏期講習会(賢治の父政次郎<sup>まさじろう</sup>らが主催、「我信念講話」と称する)で、大等の「起信論」を聴いたと推定されている。以後賢治は度々大等の講話を聴いている(宮沢他2001:70参照)。

「起信論」は馬鳴<sup>めみょう</sup>作と伝えられる述作<sup>しんだい</sup>を真諦<sup>しんたい</sup>が漢訳した論書で、「衆生<sup>しゅじやう</sup>をして、疑<sup>ぎ</sup>を除き邪執<sup>のぞ じゃしゆ</sup>を捨て、大乘<sup>だいじやう</sup>の正信<sup>しやうしん</sup>を起し、佛種<sup>ぶつしゆ</sup>をして斷ぜざらしめんと欲<sup>だん</sup>する爲<sup>ほつ ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に」(島地1927b:1)書かれたものである。摩訶衍<sup>まかえん</sup>(すなわち大乘)を法(=その実体・如何なるものなるか)と義(=その有する意義・如何)とから説き、「言<sup>い</sup>ふ所<sup>ところ</sup>の法<sup>ほふ</sup>とは、謂<sup>い</sup>はく衆生<sup>しゅじやうしん</sup>心なり」(同上:6)と、仏教の普遍性の根拠を、凡夫衆生一人一人の持つ心にもとめている。衆生心の絶対肯定である。

「法華経」では凡夫を如来蔵に目覚めさせようとの仏の意志が、美しい譬喩を以て語られる。「一切衆生<sup>じやう</sup>は 皆是<sup>みなこれわ</sup>吾<sup>こ</sup>が子なり」(島地1914:126)、仏の子だという認識に目覚めよと、釈尊は繰り返し説く。燃える家にいる子ども達に、長者が方便を設け、「我<sup>われ</sup>に種々<sup>しゅじゆ</sup>の/珍玩<sup>ちんぐわん</sup>の具<sup>ぐ</sup>の/妙寶<sup>めうぼう</sup>の好車<sup>こうじやあ</sup>有り/羊車<sup>やうじやろくしや</sup>鹿車<sup>だいろくま</sup>/大牛<sup>だいに</sup>の車<sup>くるま</sup>なり/今門外<sup>いまもんげ</sup>に在り/汝等<sup>なんだち</sup>出<sup>きた</sup>で來れ」(同上:122)といて誘い出す「三車火宅の譬喩」(「譬喩品」)は、無明・自性清浄心の譬えであり、須菩提<sup>しゆぼだい</sup>、迦旃延<sup>かせんえん</sup>、摩訶迦葉<sup>まかかしよう</sup>、目犍連<sup>もくけんれん</sup>に「この長者とはすなわち仏のことであり、窮子とは我等のことです」と、歡喜して叫ばせる「長者窮子の譬喩」(「信解品」)は、衆生の仏性への頌詩である。

「起信論」は、そのまま「法華経」と読みかえられる内容を持っていて、後に賢治が「赤本法華経」を読んだときに、理解を助けたと考えられる。

「我信念講話」では「起信論」の講義はなく、これは願教寺の「夏期仏教講習会」で、およそ20年にわたり講じられたものである(白井1993:22,23参照)。大等が賢治に与えた影響の始めである。

### 3. 諸法実相, 破地獄の文

「本迹二門」のうちの迹門（安楽行品第十四まで）の中心、「方便品第二」で、開三頭一が説かれる。すなわち、今まで声聞・縁覚（辟支仏）・菩薩と三つに分けて教えを説いてきたが、それはすべて方便、「応病与薬」の考えによる衆生救済のための手段であり、最終的にはあらゆる衆生を仏陀たらしめようとするのだ、との仏陀の真意が明らかにされる。この開三頭一を哲学的に言い換えると諸法実相となると大等は説明する。

諸法実相とは最高に難解な法である。「唯、佛と佛とのみ、乃し能く諸法實相を究盡したまへり。所謂諸法の如是相・如是性・如是體・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等なり」（島地1914：40, 41）。これは、あらゆる存在は原因と結果によってすべてつながっているという意味で、最後の如是本末究竟等は、すべては究極において等しいという意味である。そして大等は、この十如実相の文について、「古來或は略法華經と稱し、又は破地獄の文と稱する是なり」（同上中「法華大意」：32）と述べている。

賢治が盛岡高等農林学校を卒業後、しばらく家業の質屋・古着店を手伝っていたときのこととして、関徳也（政次郎の従弟、賢治より2歳7ヶ月年少、後に賢治と共に国柱会に入会、筆名は登久也）は以下の事を伝えている。大等の解説の影響を窺わせるところである。

私は朝早く賢治をたずねて、法華經の講義をしてもらったことが二、三度あります。その時法華經方便品のところで、ここは全仏教の地獄破りといわれている個所で、この方便品から出発して究極第十六寿量品で完成するのだと、実に熱意をこめて説明されたときの、あの輝かしい色白の面ざしはなかなか忘れることはできません。

（関1970：34, 35）

### 4. 一念三千, 十界互具：賢治の創作の根本思想

大等は続ける、「天台大師は此文（筆者註 破地獄の文のこと）に依て一念三千の思想を説き、圓融三諦の妙理を啓く」（島地1914「法華大意」：32, 33）と。「法華大意」13頁には「一念三千」の説明がある。大要を口語に直してみる。

三諦円融と一念三千の思想は互に表裏をなし、共に諸法実相の理趣を明らかにするものである。三千の語は十界、十如、三世間の相乗によって生ずる。十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩、仏をいい、十如とは先に見た法華経方便品に説かれる十法、すなわち、相、性、体、力、作、因、縁、果、報、本末究竟等で、三世間とは衆生、国土、五陰の三種である。十界それぞれに十界を具え（十界互具）、一界は必ず三世間を具え、又十如を具えているので、百界千如三千世間を成している、これを略して三千という。一念三千とは一念中に三千の法界を具し、三千の森羅はこの一念中に在るという意味である。更に言えば、三千の語義は即ち空仮中の円融三諦である。なぜなら十界各十界、十如、三世間を具する故に界如世間の別はなくなる（三千即空）、しかも三千の語は界如世間を具足している（三千即仮）、この空と仮を兼ね備えるものは中道である（三千即中）から。「円融三諦」とは空・仮・中の三理が相即し円融していることを言う。そしてこの「円融三諦」は森羅の諸法一法一塵のすべてに当てはまる。

賢治は、自分が一瞬に念ずる心に三千の世界があるということ、国土世間（物質・自然界）をも含めたすべてと、全ての存在はつながっているということ、すなわち、人間が心とは思っていない、心を越えた世界も人間の心にあるということを知った。

生家の浄土真宗では、信仰の対象は阿弥陀如来一仏であり、何よりも「信」を重んずる。「法華経」は所依の教典ではない。「空」の思想である「般若心経」もあげない。賢治が親しんでいた「歎異鈔」や「正信偈」、「白骨の御文章」にも、上の如き哲学的考察はない。賢治が一般人以上に、真宗について、あるいは宗教一般について勉強していたことは考えられるが、「赤本法華経」を読んだときに感動して、驚喜して身体がふるえて止まらなかったとの弟清六の証言（宮沢1992：8参照）を根拠に、「赤本法華経」が賢治にとって最初の「諸法実相」思想との出会いであったと考えたい。後に盛岡高等農林学校時代には報恩寺などに参禅して、「般若心経」を唱えていたことを、級友達が証言している（宮沢他2001：173参照）。

この一念三千（十界互具）の思想は、賢治の作品の思想的根拠である。賢治はしばしば幻覚に襲われたという。進学を諦めていた失意の時代に、「赤本法華経」の「法華大意」を読み、幻覚が異常なことではないと知り、安堵するところがあったかも知れない。以下に引用するのは、大正7年頃、進路問題で悩んでいた時期の書簡である

が、「一念三千」が繰り返し使われている。

大正7（1918）年2月23日父あて書簡（46）で、徴兵延期を望む父に、手続きの催促をする。

戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候 その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺さるゝ者も皆等しく法性に御座候

（下線は筆者 宮沢1995：50）

同年3月14日前後と推定される、高等農林の親友、保阪嘉内あて書簡（49）では、嘉内の退学処分の理由を知らせた後、

春が来たら私は兵隊靴をはいて歩ける位歩きまわり稼げる位稼いでこのかなしみをかくさうと思つてゐました。春は来ましたがあなたは今ごろはやぶれかぶれで怒つてゐるでせう。私はまたあなたが静に笑ふとも考へる。私ならばさうした。

退学も戦死もなんだ みんな自分の中の現象ではないか 保阪嘉内もシベリヤもみんな自分ではないか あゝ至心に帰命し奉る妙法蓮華經。世間皆是虚仮仏只真。

（下線は筆者 同上：57）

と、また、同3月20日前後と推定される、同じく嘉内あて書簡（50）では、誰も、何物もそれ自身では存在しない、只あるのは法性だと言っている。

保阪嘉内は退学になりました けれども誰が退学になりましたか。（略）私は斯う思ひます。誰も退学になりません 退学なんと云ふ事はどこにもありません あなたなんて全体始めから無いものです けれども又あるのでせう 退学になったり今この手紙を見たりして居ます。これは只妙法蓮華經です。妙法蓮華經が退校になりました 妙法蓮華經が手紙を読みます 下手な字でゴつゴつと書いてあるらしい手紙を読みます 手紙はもとより誰が手紙ときめた訳でもありません 元来妙法蓮華經が書いた妙法蓮華經です。あゝ生はこれ法性の生、死はこれ法性の死と云ひます。只南無妙法蓮華經 只南無妙法蓮華經

（下線は筆者 同上：59）

大正7 (1918) 年4月18日, 同窓生工藤<sup>またじ</sup>又治あて書簡 (54) では, 次のような表現を使っている。又治は南洋に赴任したばかりである。

コチラデハマダ雪ガ消エマセン。私ハ今ソノ消エナイ〔雪ノ〕上ヲ毎日毎日歩イテ居ルノデス。(略) 猿ノ足痕ヤ熊ノ足痕ニモ度々御目ニ〔カカリ〕マス。実ハ私モピストルガホシイトモ思ヒマシタ。ケレドモ熊トテモ私ガ創ツタノデスカラソナニ〔意地〕悪ク骨マデ喰フ様ナコトハシマスマイ。(略) ケレドモ熊ト蛇ヤ鱈(コンナモノガ居マスカ? 居ナイデセウ。) モモトハ親〔類デ〕ヨク往来シタノダサウデス。(略)〔コノ辺〕ノ山ヤ川ノ工合ナンカハモウアナタニハ夢ノ様ニ思ハレルデセウ。本統ニコノ山ヤ川ハ夢カ〔ラウマ〕レ、蓋口夢トイフモノガ山ヤ川ナノデセウ。

(下線は筆者 同上:62)

清六が言うように、「特に中学生のころと晩年のころは表面陽気に見えながらも、実は何とも言えないほど哀しいものを内に持っていた」(宮沢1992:5) 賢治は、全ての存在の命のつながりを知り、肉食を断ってしまう。賢治22歳の年である。

私は春から生物のからだを食ふのをやめました。

大正7 (1918) 年5月19日保阪嘉内あて書簡 (63) (同上:69)

「みな私のなかに明滅する」と、賢治は嘉内に書き送る。幻覚の例である。

石丸さんが死にました。あの人は先生のうちでは一番すきな人でした。ある日の午後私は椅子によりました。ふと心が高い方へ行きました。錫色の虚空のなかに巨きな巨きな人が横はってゐます。その人のからだは親切と静な愛とでできてゐました。私は非常にきもちがよく眼をひらいて考へて見ましたが寝てゐた人は誰かどうもわかりませんでした。次の日の新聞に石丸さんが死んだと書いてありました。私は母にその日「今日は不思議な人に遭った。」と話してゐましたので母は気味が悪がり父はそんな怪しい話をするなど、云つてゐました。／石丸博士も保阪さんもみな私のなかに明滅する。みんなみんな私の中に事件が起る。

(下線は筆者)

大正8 (1919) 年〔八月上旬〕保阪嘉内あて書簡 (153) (同上:175)

#### 5. 四要品で嘉内を慰める

「法華大意」の「法華総観」中に法華經の四要品についての言及がある。「所謂方便品は法華迹門の眼目にして、壽量品は法華本門の精要なり。安樂品は法華修行の行要を説き、普門品は化他無窮の應用を示す。此經の極要四品に在りて盡きざるなし」(島地1914「法華大意」:27)。

大正7 (1918)年3月14日前後と推定される、保阪嘉内あて書簡 (49) で賢治は、

妙法蓮華經 方便品第二

妙法蓮華經 如来壽量品第十六

妙法蓮華經 觀世音菩薩普門品第二十四

願はくは此の功德を 普く一切に及ぼし

我等と衆生と 皆共に仏道を成ぜん (同上:58)

と、安樂品を除く三品と「赤本法華經」の「廻向文」を書き送っている(筆者註「觀世音菩薩普門品」は「赤本法華經」では第二十五である)。身口意の修行を説く安樂品は、退学処分を受けた嘉内を慰めるという手紙の趣旨にそぐわないので除いたと思われる。これによってもいかに賢治が「赤本法華經」の影響を受けていたかが分かる。

#### 6. 如来壽量品:「赤い經卷」に結ばれて

「如来壽量品」では、いよいよ「汝等諦かに聽け、如来祕密神通の力を。(略)我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗劫なり」(島地1914:414)と、久遠実成の仏陀が姿を現す。仏陀は五百塵点劫の譬えを挙げて、仏陀の無量無邊百千万億那由佗阿僧祇の長さを思い量らせようとする。

仏陀は「良医治子」の譬えを用いて、顛倒した子ども達を覚醒させるために父親が旅に出たように、仏陀も衆生を濟度するために、方便力を以て滅度したのだという。

大等は「壽量品意」で、

廣く本門久成を開顯するを此一品の要領と爲し、前の方品以下に示せる迹門の



開顯と相雙んで法華經一部の眼睛を爲す。

(島地1914「法華大意」：58)

と述べているが、賢治もこの見解を関に語っている(本稿3頁に既述)。

書簡で如来寿量品に触れている個所は、大正7(1918)年、3月14日前後と推定される保阪嘉内あて書簡(49)にある。

今聞いたらあなたは学校を除名になったさうです。(略)

あなたのお父様は定めし御立腹でせうがどうか私の様な悪い友達に御怒を移しあまりに色々と御心配をかけぬ様、何と申しても私共は之から真実に深く深く求めねばなりません。悟ると云ふ事はそれを悟るのでせう。どうかどうか私の様なものをも御捨て下さらず諸共に一心に他念なく如来第一義を解し奉る為に修業して参りませう。学校はあまり御恨みにならんで下さい。只私共自身がやがて学校を造るときまでどんな処置をも非難致しますまい。

(略)

しゅじょうけんこうじん 衆生見劫尽	たい か しょうじ 大火所焼時
が し ど あんのん 我此土安穩	てんにんじょうゆまん 天人常充滿
おんりんしよどうかく 園林諸堂閣	しゅじゅほうしやうごん 種々宝莊嚴
しよてんきやくてんく 諸天撃天鼓	じやうさしゅぎかく 常作諸伎楽
うまんだらけ 雨曼陀羅華	さんぶつぎやうだいしゅ 散仏及大衆

(振り仮名は筆者 宮沢1995：55, 56)

最後が「寿量品偈文」であるが、三行目と四行目の間に、「<sup>ほうじゅたけか</sup>宝樹多華果 <sup>しゅじょうしよゆらく</sup>衆生所遊樂」が抜けている。なお、「常作諸伎楽」は「赤本法華經」では「常作衆伎楽」である。

同年6月26日には、母親を亡くした嘉内あて書簡(75)で、

あなた自らの手でかの赤い経巻の如来寿量品を御書きになつて御母さんの前に御供へなさい。(同上：91)

翌日には、やはり嘉内あて書簡(76)で、

保阪さん。諸共に深心に至心に立ち上り、敬心を以て歡喜を以てかの赤い経巻を手にとり静にその方便品、寿量品を読み奉らうではありませんか。

(同上：93)

と、方便品、寿量品を便りに法華経読誦を奨めている。「赤い経巻」とは賢治が呼び慣わしていたもので、「赤本法華経」のことである。賢治は「赤本法華経」を嘉内や関などに贈っている。

## 7. 浄土門への疑問

旅行中はいろいろ御世話になりまして何とも有り難うございます。この旅行の終りの頃のたよりな<sup>さ</sup>淋しさと云つたら仕方ありませんでした。富士川を越えるときも又黎明の阿武隈の高原にもどんなに一心に観音を念じてもすこしの心のゆるみより得られませんでした。聖道門の修業者には私は余り弱いのです。

大正5（1916）年4月4日 高橋秀松あて書簡（15） （宮沢1995：23）

高橋とは、盛岡高等農林に入学し、寄宿舎で同室になって以来、親交を結んでいる。伯母の背で「正信偈」や「白骨の御文章」を聞いて育ち、困ったときには称名が口をつく賢治であった。中学の修学旅行で皆と別れ、一人この伯母を療養先に訪ねたときもそうだった。不案内な夜の道、寂しさに耐えかねたとき、無意識に賢治の口に称名が起こった（同上：13参照）。同年11月には、文学書を買って求めたり、歌を作ったりし始めた賢治が、危険思想など持たないようにと心配しているであろう父親に、「御心配御無用に候 小生はすでに道を得候。歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」（同上：16）と書き送った賢治だった。その賢治に「浄土門」に対する疑問がわき起こってきた。しかも自分は自力の「聖道門」の修行者としても弱すぎる。

東京のそらも白く仙台のそらも白くなつかしいアンモン介や月長石やの中にあつたし胸は踊らず旅勞れに鋭くなつた神経には何を見てもはたはたとゆらめいて涙ぐまれました。こんなとき丁度汽車があなたの増田町を通るとき島津大等先生がひよつとうしろの客車から歩いて来られました。仙台の停車場で私は三時間半分<sup>ママ</sup>睡り又半分泣いてゐました。宅へ帰つてやうやく雪のひかりに平常になつたやう

です。昨日大等さんのところへ行つて来ました

(ママは筆者 同上：23)

書簡(15)はこう続く。泣くほどの胸の内は分からない。あるいは賢治は、「赤本法華経」の著者のなかに、「法華経」への篤い思いと「阿弥陀信仰」との両立を確かめたかったのだろうか。この年早春、学友たちは、賢治の読経の声を聞いている。賢治自身は、4月30日に保阪(筆者註 4月に入学)と共に願教寺に大等の法話を聞きに行っている(宮沢2001：110参照)。まだ「法華経」のみに偏さない賢治の姿が見られる。

賢治二年、二学期のこととして、農学科一年中嶋信は次のように証言している。

一年の二学期だったか、北寮で同室になったことがあります。(中略)オレは体が弱いから夜の十時以降は勉強しないというのが口ぐせで、試験の時も早寝遅起きを守っていました。そして試験場には三〇分前から出かけてゆくんです。私は一体何をしているんだろうと思い、一度あとをつけて行ったことがあるんですが、そっとドアを開けて見ると、宮沢さんはストーブのそばに立って合掌し、静かにお経を唱えていました。私の方を見てニッコリ。けれどもそのままお経を続けて、今ではあの姿がたとえようなく清く尊いものに思われるんです。

(宮沢2001：117)

12月10日の嘉内の日記に「報恩寺見物 漱石の訃」とある。報恩寺と賢治との関係を、農一大谷良之は次のように述べている。宮沢(2001)は「保阪の『報恩寺見物』は賢治にさそわれたか」としている。

私共は松井先生や学生二十人位で願教寺(真宗)中心に仏教青年会を作っていたので、日曜日によく会合していた。で宮沢君と一緒に寮を出て、私共は願教寺に、彼れは独り別れて隣の報恩寺に行つて尾崎文英の教えを受けていた。

(宮沢2001：119)

「南無阿弥陀仏」から遠ざかろうとする賢治がある。乙犬拓也によると、大正5(1916)年(賢治20歳)、(恐らく夏に)賢治は身延山に入り、修行している。丁度日

本女子大学に在学中の妹トシがそのことを父より知らされ、身延山に賢治を訪ねたという（乙犬1992：123）。大正6年には、人生問題で悩む関を報恩寺に連れて行っている。賢治の真剣な求道の姿も見取れる。

賢治は（略）「それなら報恩寺（筆者註 曹洞宗）にゆきましよう。あの和尚なら偽りは言いますまい。ぎりぎりのところを聞いてみましょう」といって（略）道をお寺へいそいだのでした。（略）庫裏の玄関に立った賢治は、太い響きのあ  
る声で「お頼<sup>たん</sup>の申す。お頼の申す」と呼びました。（略）赫顔の和尚とは前々から交渉はあったとみえ、もう親しく賢治は和尚と問答を始めました。「（略）今晚おたずねしたのは、この人が人生についてあなたのお話をうかがいたいためののですが、どうかはっきりしたところを聞かして下さい」というと、和尚は（略）言葉やさしく問いたずねるのでした。（略）賢治は私の答を補足しては、（略）（筆者註 和尚と）しんけんな問答を取りかわしましたが、私には意味のよくわからぬところもあり、あいまいな節もありましたが、そのうちに感動してわっと泣きだしたようにおぼえております。

（関1970：248, 249）

賢治が「南無阿弥陀仏」から離れ、「南無妙法蓮華経」と唱え始めた頃、大等の方は大正2年10月に長女千枝子を、その1年後に次男法麿を亡くし、「たゞ念佛して彌陀にたすけられまらすべし」（白井1993：29）という日々が続いていた。

愛児を失うという哀しみを知る前の大等が、ひたすら弘伝を願い、情熱を傾けて著したのが「赤本法華経」だった。賢治はそこに、大等の法華経讃仰の意志を感じとったに違いない。「法華大意」には、天台大師智顛の「理の一念三千」を、「一念三千即妙法五字」の法門へと高めていった日蓮に対する讃辞が読みとれる。

#### 8. 大等の日蓮讃美：賢治の改宗の誘因

「赤本法華経」をひもといて「賛序」を目にするや、奇異の念に打たれるのは、他の諸師たちの法語が、概して、静かな口振りを以て語られているのに対し、日蓮のそれが熱を感じさせることである。大等の宗祖親鸞の師である法然の法語と比べると、日蓮の情熱はいっそう際だつ。これは大橋も指摘していることなので、大橋の現代語によって見てみる。

法然の法語は、

どのお経も、釈尊の説きおかれた教えである。故に法華経や涅槃経などの大乘経を修行して仏になるのに、何の難しいことがあろう。ことに法華経は三世（過去・現在・未来）十方（八方と上下）の諸仏もこの経によって仏になられた。法華経を読み奉るに何の不足があろう。

とはいうものの、我等の才能はこの教えには及ばない。そのわけは、法華経は菩薩や声聞（仏の直弟子）を相手に説かれたので、我等凡夫はかなわぬと思うべきである。

しかるに阿弥陀仏の本願は、末代の我等の為におこして下さった願なのだから、その利益に今、決定して往生すべきである。（略）

（下線は筆者 大橋1996：43，44）

とあり、三世十方の諸仏は皆「法華経」によって仏になったのだが、「法華経」は難しすぎる。凡夫には「南無阿弥陀仏」こそがふさわしいと言っている。日蓮聖人の法語は、

法華経は八万法蔵の肝心であり、すべての経の骨髓である。三世の諸仏はこの経を師として正覚をさとり、十方の仏陀はこの教えを眼目として衆生を導かれた。（略）法華経と他の経と比較すると、天地雲泥の差がある。他の経は星のごとく法華経は月の如し。他の経は燈火や星や月のごとく、法華経は大日輪の如し。

（ここまで「兄弟鈔」）

慈恩大師は深密経・唯識論を師として法華経をよみ、嘉祥大師は般若経・中論を師として法華経をよむ。杜順・法蔵らは華嚴経・十住毘婆沙論を師として法華経をよみ、善無畏・金剛智・不空らは大日経を師として法華経をよむ。これらの人々は法華経を読んだと思っても一句一偈も読んだ人ではない。伝教大師はこういわれた、法華経を讀めたつもりでも却って法華経の心をころしたと。（略）今日蓮はそうではない。法華経以前以後、すべての経文をふかくまもり、一経の肝心たる題目を、自分も唱え人にも勧めている。（略）（「妙密上人御消息」）

（下線は筆者 大橋1996：44，45）

である。「法華大意」には、「日蓮聖人出でて日本天台の思想を整理し、此經の教格を高うすること殆ど其極に達せしめしやの概ある、(略)」(島地1914「法華大意」：19)、「而して鎌倉時代の後半に出でたる日蓮聖人に至りては、高く事觀唱題の法幢を建て、最も此經の弘傳に力む。蓋し法華經の解釋史上其見地に於て殆ど頂點に達するの概あり。是を以て鎌倉時代以後廣く都鄙に互り、深く民性に入りて此經の宣傳に力ありしものは多く聖人の門流に出づ」(同上：21, 22)とあり、聖徳太子を別にすると、最高の讚辭を日蓮に与えている。「日本天台の系統に屬する學匠と竝に日蓮宗學上に在ては、特に本迹二門の教判を主説する」(島地1914「法華大意」：10)という教学上の共通点もあり、学者である大等が、学者としての使命から日蓮に言及したことは当然とも言えるが、梅原が、「私は、島地大等の隠された信仰はあるいは法華經信仰であり、またあるいは日蓮信仰ではなかったかと思う」(梅原1996：232)と述べるほどに、日蓮への讚美がある。大等が法然聖人の如くであったならば、この著は生まれなかった。「赤本法華經」に著された、弘伝を願う「刻經趣旨」、我が国における「法華經」讚仰隆盛の歴史、日蓮への言及と懇切丁寧な解説が、賢治を「法華經」に開眼させ、更に、日蓮への帰依に向かわせたと理解したい。

なお、情報というものは、書かれたものに限らない。同じ真宗の僧侶である大谷光瑞を、賢治は名指して批判しているが(宮沢1997：18「農民芸術の興隆」参照)、大等には信頼を寄せている(宮沢1995：16参照)。信頼する人の著書を賢治は心を込めて読もうとしたであろう。

## 9. 「起信論」の順観と逆観：大等と賢治の違い

「起信論」の作者は実践修道の方法を諸種明らかにしてきたが、論の終わりに他力念仏の法門を説く。

まさし によらい しょうほうべん あ しんじん せふご い せん いねんぶつ いんねん  
 當に知るべし、如來に勝方便有りて、信心を攝護す。謂はく、專意念佛の因縁を  
 もつ ぐわん したが たほう ぶつど しゃう う つね ぶつ み なが あくだう はな  
 以て、願に随つて他方の佛土に生ずるを得、常に佛を見て、永く惡道を離る。/  
 しゆたら も ひと もつば さいほうごくらくせかい あみ だぶつ ねん しゆ ところ ぜんごん ちかう  
 修多羅に、若し人、専ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、修する所の善根を廻向  
 して、彼の世界に生ぜん願求すれば、即ち往生することを得

(島地1927b：76)

とあることについて、池田魯参はこう解釈している。

最後に、「専意念仏」の方法が付説 (151) される。初めて論のような教えを聞いても、十分に真意が伝わらず、この世にいる限りこういうことは到底、実現できそうもないとあって、悲観して命を縮めるような人があってはいけないということで、仏は善巧なる方便によって仏の教えを正しく理解しようとする人々の心を護ろうとして、念仏の教えを説かれているというのである。(略)

論では、他方仏土に往生することの一例として阿弥陀仏の西方極楽世界への往生をいうにすぎず、それも阿弥陀仏の真如法身を観ずることによって、畢竟の往生ができ、そのことによって正定衆に住することになるというのである。確かに直ちに阿弥陀仏の浄土への「即得往生」をいっているわけではないのであるが、論の作者が抱いていた具体的な往生のイメージは極楽往生であったということもいえるわけで、その意味でこの一段は後に浄土教の形成に大きな関わりを持つことになるのである。

(池田1998 : 95)

大等は離言院 (養父島地黙雷) の説を紹介して、逆観の可能性を指摘する。

これに依て先考離言院常に語りて曰く、この論を読むもの須らく順逆二観あることを知るべし。順観すれば、上來の自力行を正とし末段の他方法を傍とす。爾に若し逆観すれば則ち論主の正意この彌陀法に在て存し、前來の諸法門は畢竟この浄土念佛の行布施設と見るべし。故に順観の前には一眞如法を一論の根本とし、逆観すれば一名號法を一論の大本と爲す。(略) また一論の大綱を説くに通途、一心・二門・三大・四信・五行と云ふに附加するに更に六字の一句を以てし一心・二門・三大・四信・五行・六字と云はざれば盡理と云ふべからずと曰へり。

(島地1927a : 25)

願教時の講習会では、聴衆に宗門の人が多かったであろうから、「六字の名号」を加えて説かれていたであろう。大等の教え子たちは、特に晩年の大等が阿弥陀仏への敬虔な信仰のうちに生きていたと伝えている (白井1993 : 92-130参照)。したがって、「六字の名号を加えて云々」はそのままその時点での大等の見解と見てよいと思われる。

それはまた、大等自身の言葉によって保証される。

豫常に謂へらく、禪と念佛とは一面には法華經の概括なり、法華經は他面に於て念佛と禪との説明なりと。

(島地1914「法華大意」：22)

大等は「赤本法華經」の「普門品」に、漢訳にはない普門品頌7頌28句を、梵本から採って加えたが、これも上の思想から出たものと言える。法華經全28品中、阿弥陀仏の名は2回しか出てこないが、この阿弥陀仏供養の頌を加えることにより4回の出現となっている。賢治は長久寺で禪を学ぼうとしたとき、天魔に魅了されないように、地中深く紙片に題目を書きとめて沈めておいたという(関1970：110)。また、賢治の遺言によって作られた「国訳妙法蓮華經」には、阿弥陀仏供養の頌はない。

## 10. おわりに

以上、賢治が「赤本法華經」を読む前に、大等の「起信論」講義を聞いていたことが「法華經」理解を助けたこと、「赤本法華經」の解説を賢治が「書簡」で引用していること、唯物論に与しえない賢治が「諸法実相」の解説を読み自己肯定できたこと、大等の日蓮への讃辞が賢治を日蓮に近づけたこと等を通して、大等の賢治に与えた影響を考察した。大等においては「念仏」と「法華經」が共存し得たが、「赤本法華經」に感動し、日蓮への関心を呼び起こされた賢治は、「阿弥陀仏」にすぎるだけの消極的な信仰に満足できず、やがて、「南無妙法蓮華經」の唱題による菩薩行の実践者へと変身してゆく。人に尽くさずにはいられない賢治のもって生まれた性質が、「赤本法華經」を揺すぶったのだ、静(理解)から動(実践)へ。大等はその仕掛け人だったと言えよう。

## 参考文献

- 宮沢清六他(編)(2001)『【新】校本宮澤賢治全集 第十六卷(下) 補遺・資料年譜編』筑摩書房
- 島地大等(1927a)「大乘起信論解題」国民文庫刊行会(編)『国訳大蔵經 論部 第五卷』国民文庫刊行会
- 島地大等(訳)(1927b)「国訳大乘起信論」国民文庫刊行会(編)『国訳大蔵經 論



部 第五卷』国民文庫刊行会

- 島地大等 (1914) 『漢和對照妙法蓮華經』 明治書院
- 白井成允 (1993) 『島地大等和上行実』 大空社
- 関登久也 (1970) 『賢治随聞』 角川書店
- 宮沢清六 (1992) 「序論 兄賢治の生涯」 大島宏之 (編) (1992) 『宮沢賢治の宗教世界』 溪水社, 3-19
- 乙犬拓也 (1992) 「宮沢賢治の宗教世界—禁欲にみる求道の軌跡」 大島宏之編 『宮沢賢治の宗教世界』 溪水社, 115-166
- 森荘巳池 (1992) 「宮沢賢治と法華經の關係」 大島宏之編 『宮沢賢治の宗教世界』 溪水社, 523-564
- 宮沢賢治 (1995) 『【新】校本宮澤賢治全集 第十五卷 書簡 本文篇』 筑摩書房
- 大橋富士子 (1996) 『宮澤賢治 まことの愛』 真世界社
- 梅原 猛 (1996) 「賢治と日蓮」 庄野音比古 (編) 『文學界』 9月号文藝春秋社, 226-248
- 宮沢賢治 (1997) 『【新】校本宮澤賢治全集 第十三卷 (上) : 覚書・手帳 本文篇』 筑摩書房
- 池田魯参 (1998) 『現代語訳 大乘起信論—仏教の普遍性を説く—』 大蔵出版株式会社
- 宮澤賢治 (1975) 『校本宮澤賢治全集 第十二卷 (上)』 筑摩書房

(琉球大学留学生センター非常勤講師)

## On the influence of Daito Shimaji on Kenji Miyazawa

TAMURA, Kimiko

**Keyword :** The Awakening of Faith, The Lotus Sutra (Myohorengekyo), The ten essential qualities, or characteristics, of thing, The 3,000 worlds in one thought, The ten realms of existence, each containing the other nine realms

### Abstract

In this paper I argue that Daito Shimaji's "Chinese-Japanese Myohorengekyo" caused Kenji Miyazawa to become a believer in The Lotus Sutra. On the following 4 points I'll prove that my argument is right.

- (1) Daito's lecture on " The Awakening of Faith" and his explanations of The Lotus Sutra helped Kenji to understand the meaning of The Lotus Sutra.
- (2) Daito's affirmative reference to Nichiren in the explanations of this Sutra awoke Kenji's interest in Nichiren.
- (3) This was one of the reasons why Kenji became skeptical about the Jodo-Sect and chose the "namu-myohorengekyo (Glory to the Holy Sutra of the Lotus of the Supreme Law)".
- (4) Kenji interpreted "The Awakening of Faith" different from Daito.

(University of the Ryukyus)